女子短大生のキャリア形成に関する就業支援活動

―本学学生へのアンケート調査から―

Jobhunting Support Activities for Female Junior College Student

― Analysis of survery data from MEJIRO College ―

油谷　純子

（ Sumiko YUTANI）

Ⅰ．研究の背景

働きたくない若者が増えている、就職しても嫌なことがあるとすぐにやめてしまう、我慢が足りない、目的意識が低いなど、若者の職業に対する考え方の問題が提起され、国を挙げてその対応に乗り出している。平成25年１月、「教育再生を実行するための３つの主要課題について検討を開始し、「大学・入試の抜本改革」部会は「職業教育、体験活動で「志」を育てる項目で「キャリア教育・職業教育推進法（仮称）」の制定で、全ての学生の、インターンシップやギャップタームを活用した体験活動（国とふるさと、環境を守る仕事―たとえば、海外NGO、農業・福祉体験、被災地支援、自衛隊・消防団体験等）の参加に向けた環境整備を謳っている。

また、中央教育審議会では平成23年１月には「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」の答申が出された。その中では若者の現状としての大きな困難は２つ挙がっている。その一つは、「学校から社会・職業への移行」が円滑に行われていない。その証左として、完全失業率：約9.1％、非正規雇用：約32％、無業者：約63万人、早期離職率：高卒４割、大卒３割、短大卒４割である。二つ目の「社会的・職業的自立」に向けての様々な課題は①コミュニケーション能力等職業人としての基本的能力の低下、②職業意識・職業観の未熟さ、③進路意識・目的意識が希薄な進学者の増加があるとしている。解決の基本的な考え方は、「キャリア教育」「職業教育」の充実であり、平成23年度から大学設置基準が改正され、「教育課程の内外を通じて社会的・職業的自立に向けた指導等に取り組むための体制整備を踏まえた取組の実施、」「各大学・短期大学の機能分化の下、要請する人材像・能力を明確化した職業教育の充実、実践的な養育の展開」「生涯学習ニーズ等への対応」の３つが示された。

目白大学短期大学部（以下本学とする）も基礎教育科目の「キャリア形成科目群」に「職業と生活」のグループに「会社の仕組み」「ビジネス文書」「キャリアデザイン」の３科目を配置し、キャリア教育・職業教育を充実している。また、「インターンシップ」科目も設置し、産業界の実際も経験し、職業に必要な能力の育成を目的としている。キャリアセンターでは様々な行事や個人相談、保護者への就職説明会等多彩なプログラムを用意し、またセミナー担任と

の連携を図り、学生の就職活動を支援している。

しかし、その効果はあまり顕著なものではなく、就職活動を積極的に行わない学生、就職試験を落ちると意欲を喪失してしまい活動を継続できない学生、活動をすることが必要と理解はするが行動が伴わないもの、自己理解が十分でなく進路を決めかねる学生、試験を受けることを躊躇する学生等、その現象は様々ではあるが、支援の方法にも効果的な方法は見いだせないでいる。

いつの時代も、学生は時代を敏感に肌で感じているものであると思う。努力しても明るい未来が見えない状況をひしひしと感じ、なるべく今を長く生きたいとのモラトリアムの状態も大きな要因だと筆者は考えている。

今回、学生のキャリア意識、人生に対する考え、自己評価等を調査し、職業に対する考え方を探り、今後の教育・指導に役立てたい目的でアンケートを実施した。このアンケートは本学１年次生を対象とした。

Ⅱ．働く女性の現状

１）女性の雇用を取り巻く環境

女性の雇用を取り巻く環境は、男女雇用機会均等及び改正労働基準法成立・交付（1986）、育児介護休業法（1995）と近年、かなり改善されてきている。1999年には男女共同参画社会基本法の成立、2000年以降は保育サービスの拡大、2003年には少子化社会対策基本法、次世代育成対策推進法と女性の「子育てと仕事の両立支援」を旗印に相次いで支援施策が打ち出されている。しかしながら女性の合計特殊出生率（一人の女性が生涯に産むとされる子どもの数）は2012年に1.41、16年ぶりに1.4を回復したとはいえ、働く女性が子どもを産み育てる支援策は十分とは言えない。

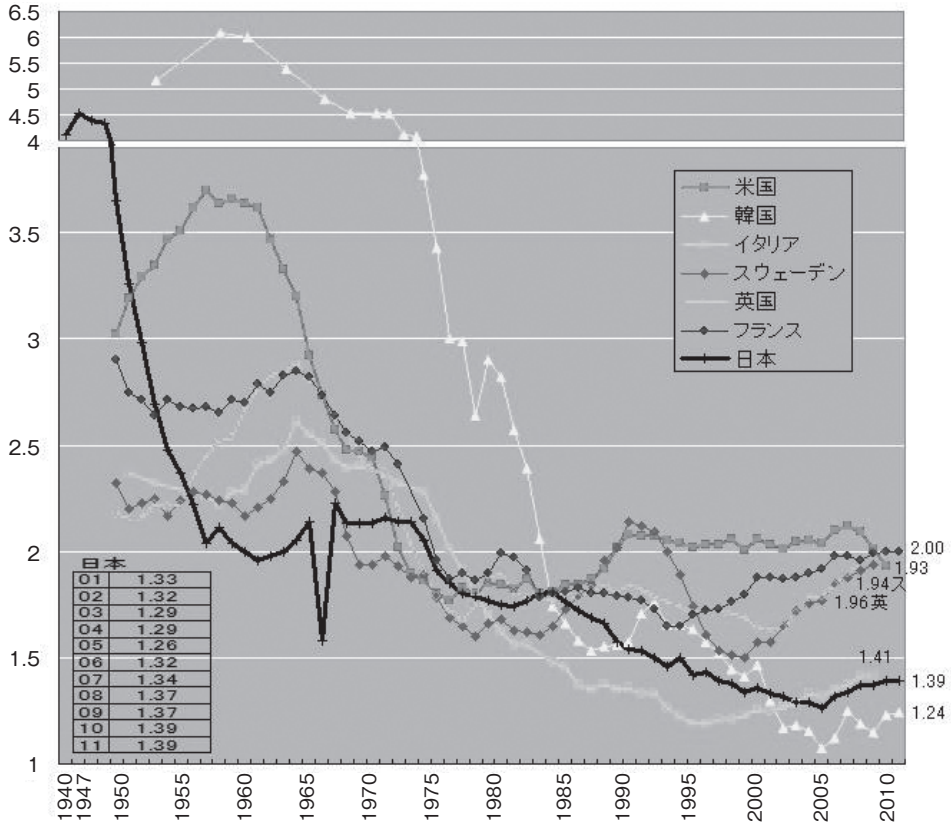
諸外国の例を見ると韓国を除いては最低の水準にある。（図表１）

（図表１）は世界の先進国７か国の合計特殊出生率の推移である。1990年ごろから下降状況を示していたカーブは底をつき、僅かずつではあるが上昇の兆しを見せている。日本は2005年を底として少しずつではあるが上昇を見せ、2012年に最低の値を示している韓国も上昇へと向かっている。先に述べたが、女性施策（働く女性の施策）が徐々にではあるが功を奏していると考えられる。

２）働く女性の状況

平成23年度の女性の労働人口は2,632万人で前年に比べ11万人減少した。生産年齢（15歳～64歳）の労働人口は2,419万人で、生産年齢の労働力率は63.0％（前年同）である。年齢階級別の労働力率は「25～29歳」（77.2％）と「45～49歳」（75.7％）を左右のピークとし、「35～39歳」を底とするM字型カーブを描いているが、M字型の底の値は0.9ポイント上昇し67.0％となった。

合計特殊出生率の推移（日本及び諸外国）



（注）合計特殊出生率は女性の年齢別出生率を合計した値。数字は各国最新年次。日本11年概数。
（資料）厚生労働省「平成13年度人口動態統計特殊報告」「人口動態統計」（日本全年、その他最新年）
国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集2010」、korea National Statios Office

図表１

M字型カーブの谷が浅く、２つの山が右側、年齢が５歳ほど、移行している。これは働き始める年齢が５歳高く、子育て後の仕事への復帰が５歳高くなったことを示している。女性の高学歴化と出産の高齢化が関係していると考えられる。また、配偶関係別労働力率の変化は「25～29歳」、「30～34歳」の有配偶者の労働力率は平成７年と比較すると大幅に上昇している。特に「25～29歳」「30～35歳」の年齢層の上昇が著しい。これは、出産・育児を経験した女性が仕事を継続している、あるいは再び仕事に復帰していることを示していると考えられる。出産と同時に仕事を離れるのではなく、働き続ける、短期間仕事を休んで仕事に復帰する女性が増加していることを示している。

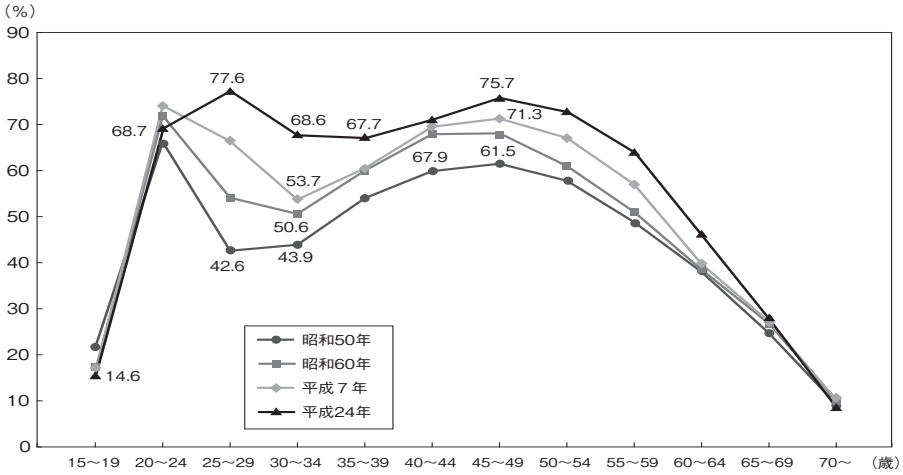
次に、M字型カーブの谷にあたる25歳から44歳までの年齢階級にある女性についての雇用形態をみると、「25～29歳」では「正規の職員・従業員」（63.0％）、「非正規の職員・従業員」（37.4％）と「正規の職員・従業員」の割合が高い。「35～39歳」では「非正規の職員・従業

員」（51.5%）、「正規の職員・従業員」（48.5%）となり、「正規の職員・従業員」の割合と「非正規の職員・従業員」との割合が逆転している。「40～44歳」では「正規の職員・従業員」の割合（41.9%）、「非正規の職員・従業員」（58.1%）となり、年齢が高くなるほど、「正規の職員・従業員」の割合が低下し、「非正規の職員・従業員」の割合が上昇してくることがわかる。「非正規の職員・従業員」のうち、「パート・アルバイト」の割合が一貫して増えており、妊娠、出産等で退職した女性の再就職が正規ではなく、非正規となっていることがうかがえる。

３）既婚女性の労働の状況

第１子出産前後の継続就業の割合をみると、妊娠前に就業していた妻の割合が1980年代後半から2000年代前半の変化は9.3%上昇しているが、妊娠前に就業していた妻の割合を100とした場合、出産後も継続就業する妻の割合は1980年代後半の39.0%から2000年代前半は38.0%に微減しており、第１子出産後の妻の継続就業は依然として低い状況にある。

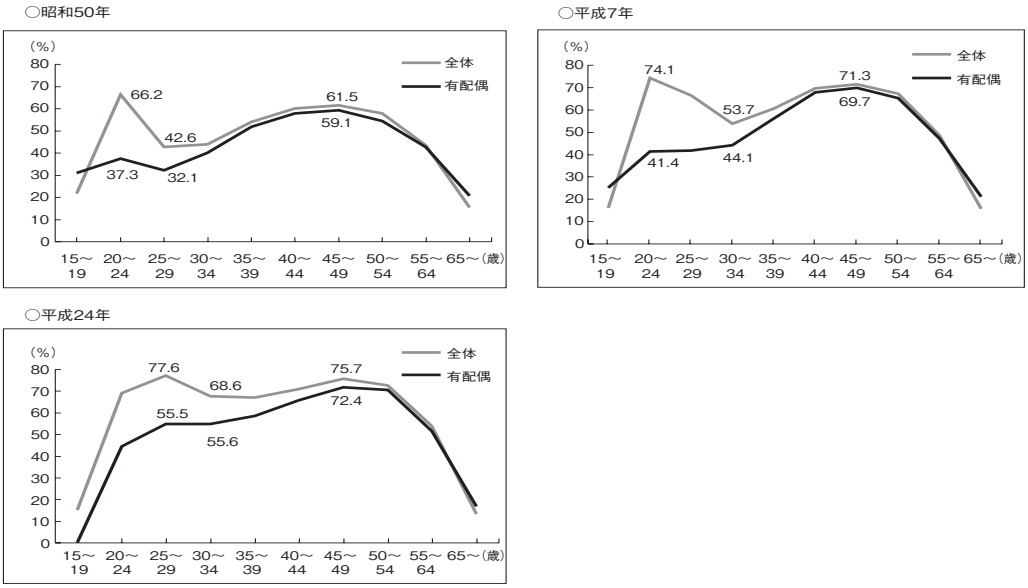
第１子の出生後の母の就業状況の変化を「21世紀出生児縦断調査」」により見てみると、出産１年前に就業していた母の割合は「常勤」（32.6%）「パート・アルバイト」（16.2%）「自営業・家業、内職、その他」（5.7%）、「家事（専業）、無業、学生」（44.9%）であるが、出産半年後の第１回調査では「常勤」（16.6%）（−16.6%）、「パート・アルバイト」（3.6%）（−12.6%）と低下がみられる。多くの者が勤めをやめ、家事等に従事する形に就業状況が変化している。また、「常勤」の割合は出産半年後の就業は第１回調査から第９回の調査では3.2%の上昇がみられるが、「パート・アルバイト」の割合は32.34%と大幅な増加があり、出産を機に離職した母が再就職する際、多くが「パート・アルバイト」に従事する就業形態をとることがうかがわれる。



（備考）１．総務省「労働力調査（基本集計）」より作成。
２．「労働力率」は，15歳以上人口に占める労働力人口（就業者＋完全失業者）の割合。

図表２−１　女性の年齢階級別労働力率の推移

参考：女性の配偶関係別年齢階級別労働力率



図表２−２

Ⅲ．本学の学生のキャリア形成の意識調査

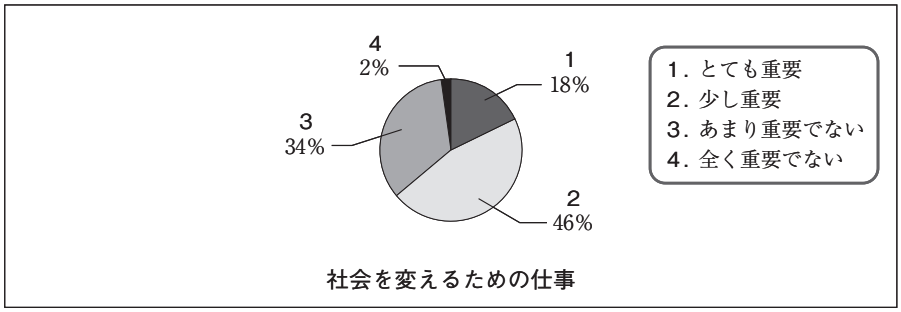
本学の学生（１年次生）のキャリア形成に対する意識を探るためにアンケート調査を実施した。

実施時期：平成25年７月

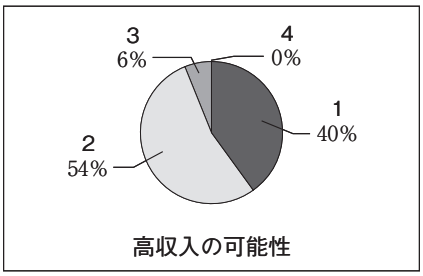
対象学生：短期大学部１年次生（生活科学科：55名、製菓学科：51名、ビジネス社会学科：33名）

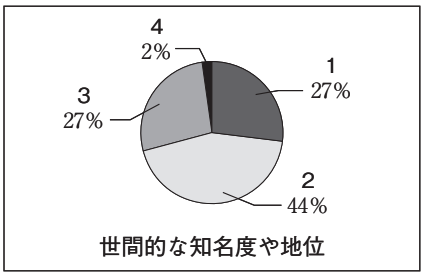
結果：以下のグラフに示す

設問１では、短大卒業後のキャリアを考えるときにどのような事柄を重要と考えるのか



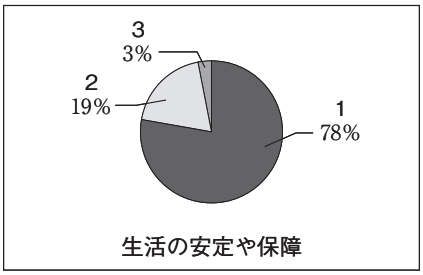
社会を変えるための仕事の重要性は64％が重要と捉えている。仕事の社会に対する意義をとらえていると言える。生活科学科は他の学科に比べて、「とても重要」「少し重要」が約８割であった。

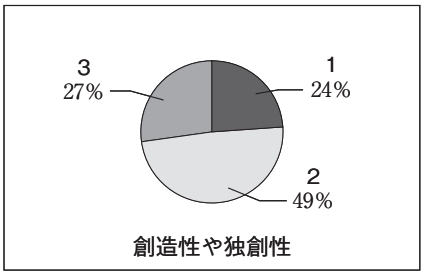




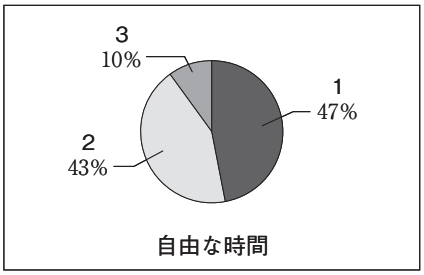
収入に関しては「とても重要」「少し重要」と考える学生が94％であり、収入に関しては関心が高い。

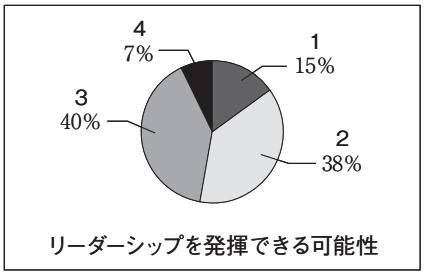
知名度、地位に関しても「とても重要」「少し重要」で71％であった。やはり、よく知られた企業に就職したいとの表れであろう。

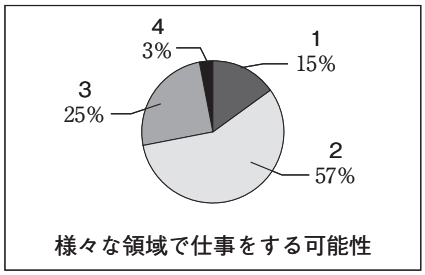




仕事は趣味的や自己実現的なものではなく、「生活の安定や保障」に関しては80％の学生が重要と捉えている。学生の職業意識が希薄であるとの見方があるが、あながちそうとも言えない結果である。「創造性や独創性」に関しても重要と考える率は高く、質の良い仕事を求めていると言える。

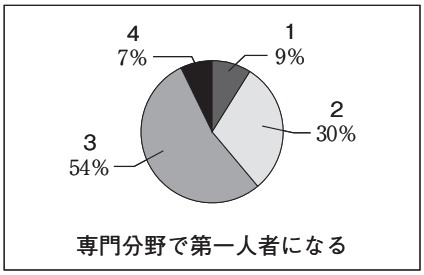


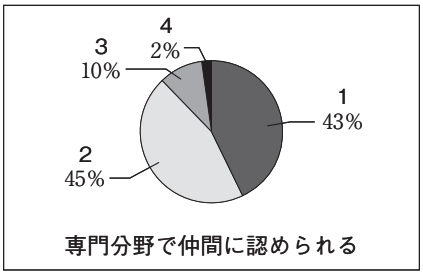




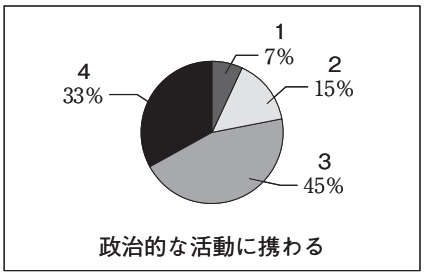
「自由な時間を求める意識」（90％）と高い。リーダーシップを発揮することが「重要と考える学生」と様々な仕事をしたいと考える学生は72％と高い率である。事務職希望の学生が減少の傾向にあることと関連があるのかもしれない。販売など人を相手にする仕事を希望する学生が多いのは　事務は単調な仕事と捉えている可能性もあるようだ。

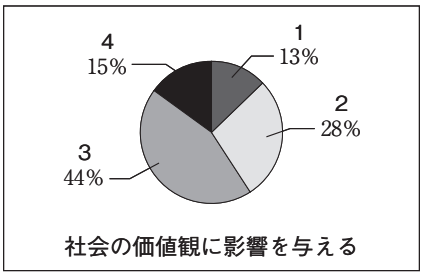
設問２では人生にとっての重要性を聞いた



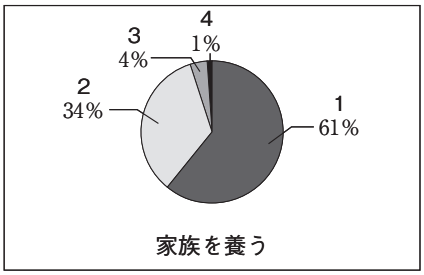


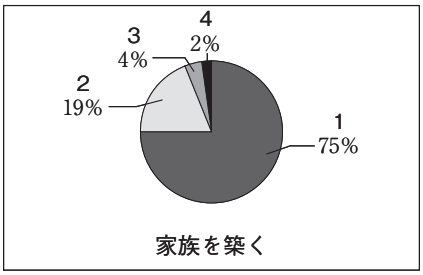
自分にとって、第一人者になるより、仲間に認められることが重要と考える学生が多い。仲間を大切にする若者の意識が表れている。



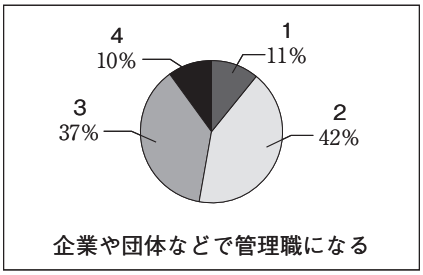


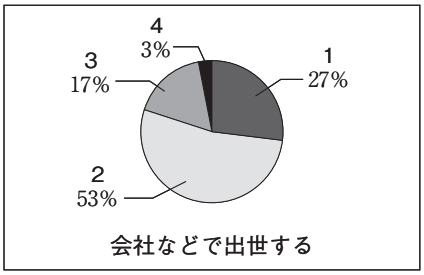
社会に関わることに対する重要性は「価値観に影響を与えることに関しては４割程度が重要と考えているが、政治的な活動に関しては「重要でない」と答えており、若者の政治に対する関心度は低い。



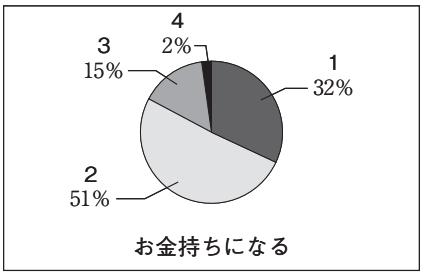


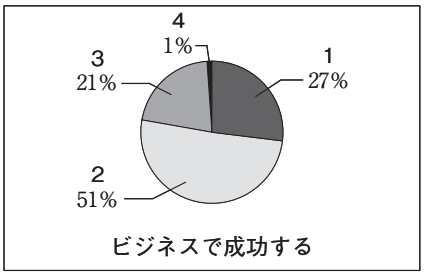
家庭、家族に対する思いは強く、「家庭を築く」に関しては94％「重要」と考えている。女性の非婚化の傾向とは一致しなかった。意外なのは、「家族を養う」は「重要」と考える学生が95％であったことである。家族を養うのは男性であるとの意識が確実に薄れている。



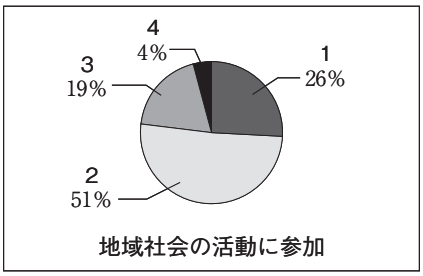


組織で「出世する」ことの重要度は「管理職になる」と少し違う認識があるようで、管理職になることには重要性はあまり高くなく、出世することには重要性は高い。管理職に対する捉え方はあまり魅力はなく、出世は成功と捉えていると考えられる。「１－２　高収入」に対する重要性と関連があるとも取れる。





「お金持ちになる」「ビジネスで成功する」「会社などで出世する」「高収入」の設問は同じようなグラフになり、経済的な成功が重要と考えていることがわかる。



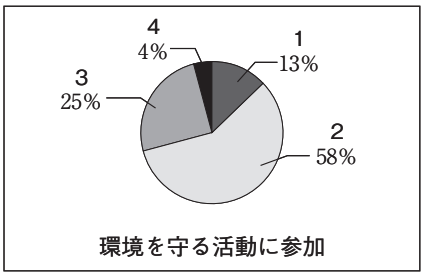
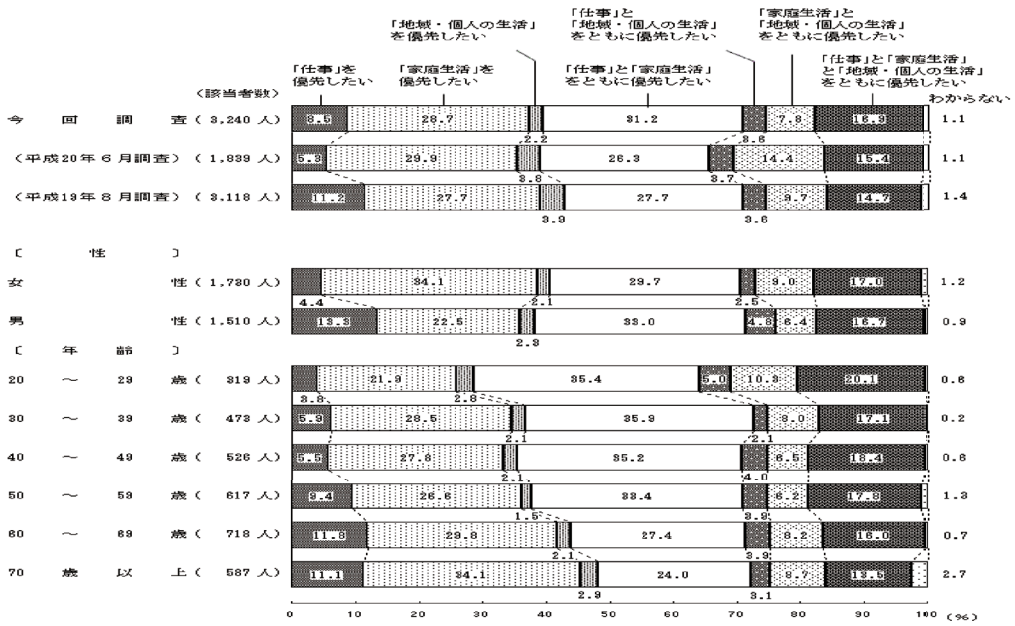


図18　「仕事」，「家庭生活」，「地域・個人生活」の関わり方 ～ 希望優先度



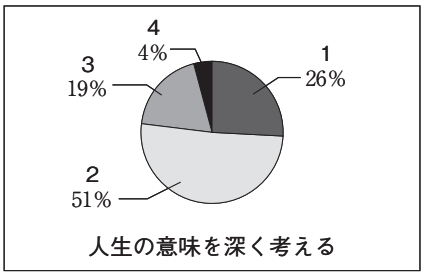
〈注〉平成20年6月調査「仕事と生活の調和〈ワーク・ライフ・バランス〉に関する特別世論調査」は標本数が3,000人のため,直接比較していない。

図表３　「仕事と生活の調和（ライフ・ワーク・バランス）に関する特別調査」

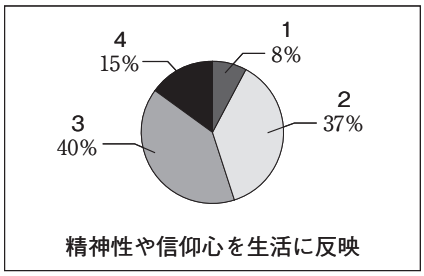
「地域社会の活動に参加」「環境を守る活動に参加」等の活動に関しては人生で重要と捉えているが、「地域社会のリーダーになる」に関しては、あまり重要とは捉えていない。

「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）に関する特別世論調査」（総理府の調査：平成20年７月、対象者：20歳以上、3000人、面接調査）図表３によると『「仕事」と「家庭生活」をともに優先したい』が４％増加し、「家庭生活」と「地域・個人の生活をともに優先したいが徐々に微減している。女性で見てみると「家庭生活」を優先したいが最も高く（34.1％）、「仕事」と「家庭生活」をともに優先したい（29.7％）が続く。

本学の学生の「ライフ・ワーク・バランス」に関する考え方は内閣府の調査とほぼ同様な傾向であり、調和が取れた考え方をしているとも読み取れる。

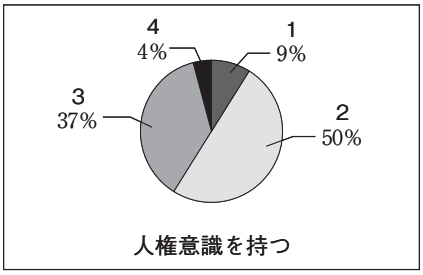


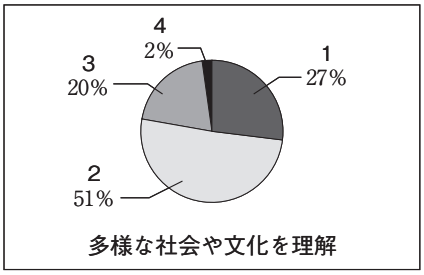
人生の意味を深く考える



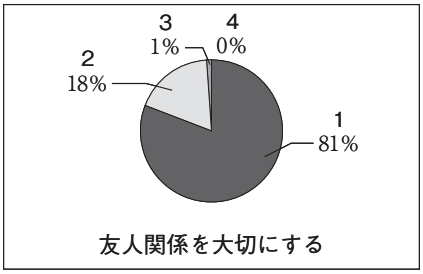
精神性や信仰心を生活に反映

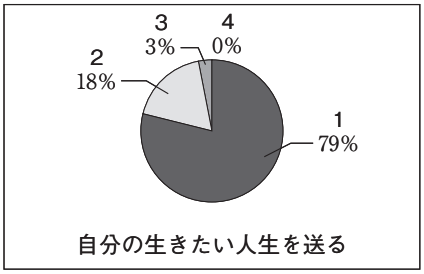
「人生の意味を深く考える」は重要と考えるが87％であり、人生を真摯にとらえていることがわかる。「精神性や信仰心を生活に反映」に関しては重要と考える学生は４割ほどである。

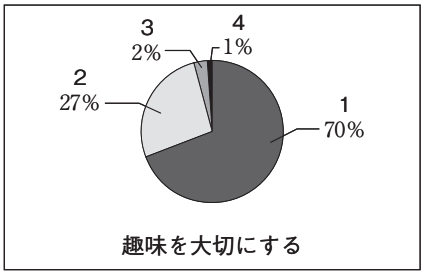




「多様な社会や文化を理解」に関して重要と捉えている学生が９割近い。グローバル社会に対する関心は高い。それに比較すると「人権意識を持つは、あまり重要と考えない学生も44％であり、人権意識はあまり高いものではない。本学に「人権」関連科目を設置することも検討する必要がある。



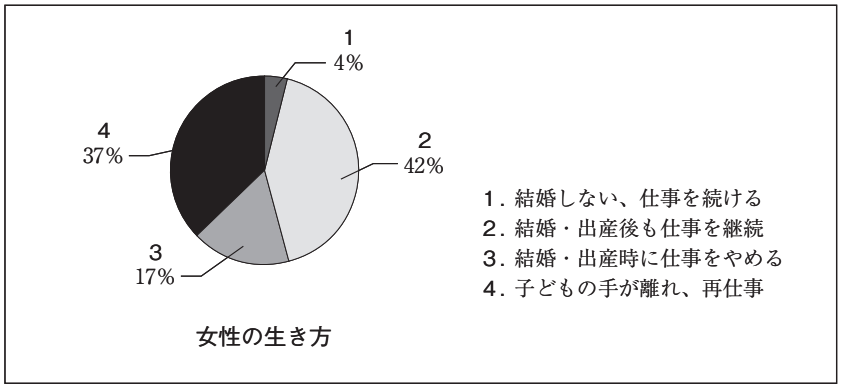




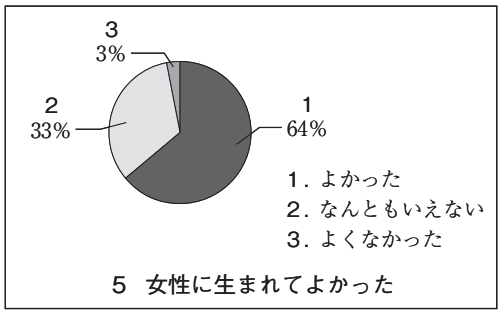
「友人関係を大切にする」「自分の生きたい人生を送る」「趣味を大切にする」の３つの設問は、いずれも重要と考えている学生が大部分であり、豊かな人生を送ることが何よりも大切だと考えていることがうかがえる。その中でも特に友人関係は最も関心が深く最重要な事柄であり、学生の日頃の言動と一致する。良くとらえれば相手を大切にする思いやりがあるが、見方を変えれば、相手を傷つけるかもしれないことには触れず、自分も傷つくことを恐れる傾向が

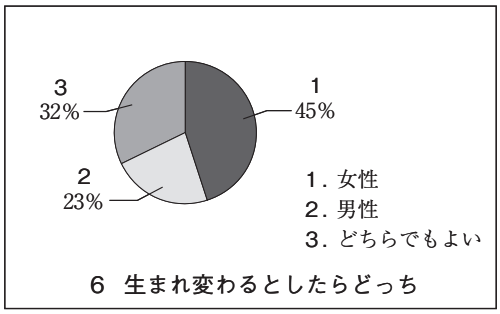
あることが分かった。

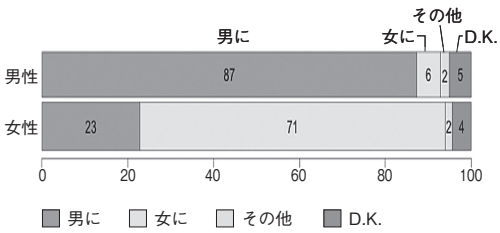
設問３　女性の生き方



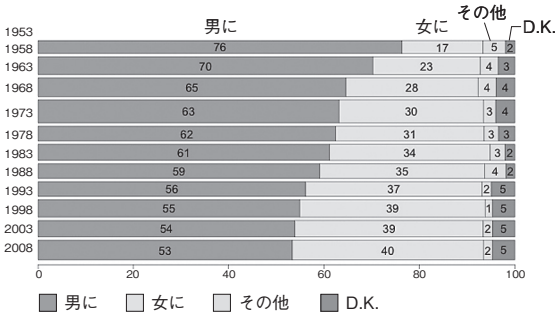
「結婚・出産後も仕事を継続する」が42%であり、仕事をし続けるは46%である。







図表４－１　20～80歳対象の調査

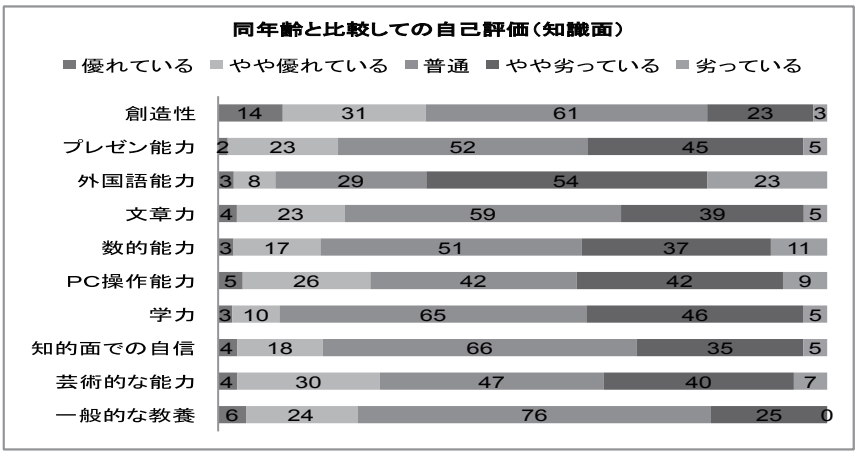


図表４－２　20歳の希望の推移

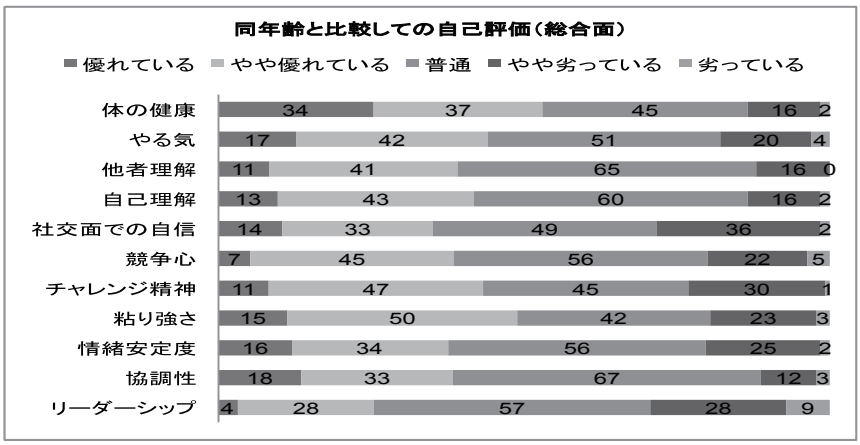
図表４　「日本人の国民調査」統計数理研究所　2008年度調査

「生まれ変わるとすればどちらの性か」の設問は「国民性調査」として統計数理研究所1985年から５年ごとに調査をしている。直近の調査では2008年の調査が図表４であるが、女性では「女性に生まれたい」（71％）、「男性に生まれたい」（23％）であるのに対し、本学の学生では「女性に生まれたい」（45％）、「男性に生まれたい」（23％）である。生まれたい性の推移（図表４－２）を見てみると2003年には、女性に生まれたいが42％であったが、2008年には39％とその率は減少している。本学の学生は全国の調査結果とほぼ同じであった。その理由は様々であろうが、環太平洋価値観国際比較調査（2005年～ 2008年：上海、台湾、韓国、北京、香港、インド、シンガポール、オーストラリア、日本、米国）に示したように、最も高い米国では84.5％であり、日本は次いで71％である。これは男女の平等感、男女の地位の影響を受けると考えられている。本学の学生がどのような理由で「男に生まれたい」「女に生まれたい」と思っているのかは、ヒアリングをして調査を続けたい。

設問６　同年齢と比較しての自己評価



図表５－１　同年齢と比較しての自己評価（知的能力面）



図表５－２

「短期大学生に関する調査研究」（財団法人短大基準協会、2011年度：以下短大調査と呼ぶ）との比較をしてみても、ほぼ平均的な値を示している。

Ⅳ．今後の課題

少子高齢社会が急速に進行する中、持続可能な全員参加型社会を構築していくには女性の労働力は不可欠である。また、男女共同参画社会の実現に向けて、女性の様々な分野における地位の向上を考えるとき、女性の潜在能力を引き出し、活躍を推進することは社会の活力につながる重要な要素である。

翻って本学学生の就職状況を見るとき、積極的に社会参加を目指す学生はそう多くない状況がある。その原因をとらえようと意識を調査した結果、以下のことが考えられる。

1．仕事は経済的な面から考えても重要な事柄である。
2．仕事で仲間に認められるようになりたい。
3．様々な領域に関する仕事をしたい思いがあり、変化のある仕事を希望する。
4．人生には仕事も大事であるが、家庭、友人と良好な関係を築きたい。
5．結婚はしようと思い、結婚・出産後も仕事は続けたい。子育ても大切であり、そのため一時的に仕事を離れるのは仕方がない。
6．仕事に必要とする学力面等にはあまり自信はないが、健康と粘り強さには自信がある。

これらを踏まえて、本学学生へのキャリア形成、就業サポートは以下の事柄が必要と考える。

1．学力の強化（特に外国語、数的能力を中心とした学力）に対する支援活動
2．女性としてのキャリア形成に関する知識の付与
3．自信を持たせる（自己評価向上）ために資格等の取得など、達成感を感じる仕掛け

これまでも問題として挙げられ、それに向けての方策がとられてきているが、今回のアンケート結果からその事柄が裏付けられた。今後、カリキュラム構築、その他の支援に具体策を提示し、活用したいと考えている。

【参考文献・資料】

1．中央教育審議会答申『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』2011年１月
2．教育再生実行会議『キャリア教育・職業教育推進法（仮称）』2013年５月
3．改正男女雇用均等法
4．武石恵美子（編著）『女性の働きかた』ミネルバ書房、2010.
5．椿　ますみ　『短大生のキャリア・デザインに関する支援活動～女性のライフ・バランスを支えるために～』一宮女子大学紀要第45集、2006
6．経済産業省委託事業『平成23年度におけるダイバーシティ推進の経営効果等に関する調査研究～

企業活力とダイバーシティと女性活躍の推進〜』2012
7．厚生労働省『平成23年働く女性の実情』2012.7
8．財団法人短期大学基準協会『短期大学学生に関する調査研究　2010年JJCSS調査全体結果報告』

参考　アンケート紙

1　短大卒業後のキャリアを考えるとき、次の事柄はどの程度重要ですか。

	とても重要	少し重要	あまり重要でない	全く重要でない
社会を変えるための仕事				
高収入の可能性				
世間的な知名度や地位				
生活の安定や保				
創造性や独創性				
自己を表現する仕事				
自由な時間				
リーダーシップを発揮できる可能性				
様々な両機の仕事をする可能性				

2　あなたの人生にとって、次の事柄はどの程度重要ですか。

	とても重要	少し重要	あまり重要でない	全く重要でない
専門分野で第一人者になる				
専門分野で仲間に認められる				
政治的な活動にたずさわる				
社会の価値観に影響を与える				
家族を養う				
家庭を築く				
企業や団体などで管理職になる				
会社などで出世する				
お金持ちになる				
困っている人の役に立つ				
ビジネスで成功する				
環境を守るための活動に参加				
人生の意味を深く考える				
地域社会の活動に参加				
人権意識の向上に役立つ				
政治の動向に関心を持つ				
地域社会のリーダーになる				
精神性や信仰心を生活に反映させる				
多様な社会や文化を理解する				
友人関係を大切にする				
自分の生きたい人生を送る				
趣味を大切にする				

3　次のうち、女性の生き方としてあなたの考えに最も近いものはどれですか。○をつけてください

	①　結婚しないで仕事を続ける
	②　結婚や出産をしても仕事を続ける
	③　結婚や出産時に仕事をやめる
	④　子どもの手が離れたら再び働く
	⑤　就職はしないで結婚する

4　次の項目について、あなたの考えをそれぞれ一つずつ選び番号に○をつけてください、

	女は家庭、男は仕事
	女性は仕事を持つのはよいが、家事・育児はきちんとすべきである
	女性が、男性と同等の仕事内容、賃金、昇進を得られるようになることが望ましい
	女性が社会に出て働けば、社会の進歩や発展にとってもプラスになることが多い
	女性も仕事を通じて自己実現すべきだ
	仕事には女性向きも男性向きもない
	お金になる仕事だけが仕事ではない

5　あなたは現在の自分の女性に生まれてよかったと思いますか。一つ選んでください。

	よかった
	なんとも言えない
	よくなかった

6　あなたは、生まれ変わるとしたら、どちらの性になりたいですか。一つ選んでください。

	女性
	男性
	どちらでもよい

7　あなたは他の同年代の二兎たちと比べて、次の事項についてどのように自己を判断しますか。
当てはまるものにそれぞれの枠に○を入れてください。

	優れている	やや優れている	普通	やや劣っている	劣っている
①　一般的な教養					
②　芸術的な能力					
③　知的面での自信					
④　学力					
⑤　ＰＣ操作能力					
⑥　数的能力					
⑦　文章力					
⑧　外国語能力					
⑨　プレゼン能力					
⑩　創造性					
⑪　リーダーシップ					
⑫　協調性					
⑬　情緒安定度					
⑭　粘り強さ					
⑮　チャレンジ精神					
⑯　競争心					
⑰　社交面での自信					
⑱　自己理解					
⑲　他者理解					
⑳　やる気					
㉑　体の健康					

以上